神奈川県立総合教育センター長期研修員研究報告3:45～48.2005

教科との連携を視野に入れた「総合的な学習の時間」のカリキュラム開発

―「英語」からのアプローチを中心に―

吉　川　知　彦[1]

平成15年10月中央教育審議会答申「初等中等教育における当面の教育課程及び指導の充実・改善方策について」（以下「15年答申」とする）は、「総合的な学習の時間」の課題として、教科との関連性が十分配慮されていない点を指摘している。そこで本研究では、「総合的な学習の時間」と教科（特に「英語」）を中心に、中学校3年間の活動を見通しながら、両者が有機的に関連しあうカリキュラムの開発に取り組んだ。

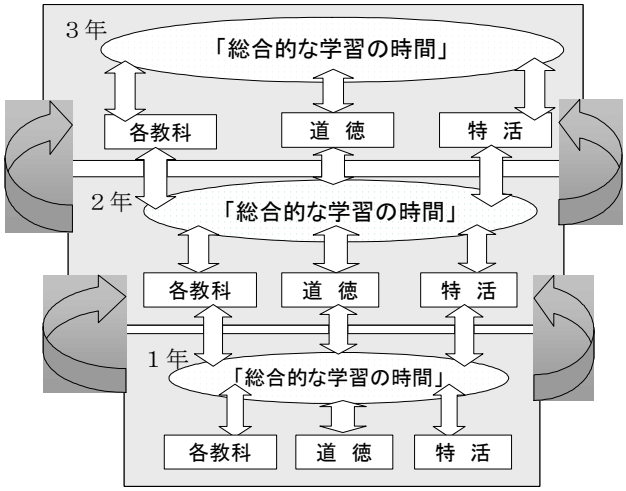
はじめに

「総合的な学習の時間」は、教科等で身に付けた知識や技能を相互に関連付け、総合的に働かせながら、従来の教科の枠を越えた課題に自ら取り組む姿勢を育成することが目的である。特に年間の指導の大部分を占める各教科との関わりは重要であろう。ところが「15年答申」では、「総合的な学習の時間」の現状と実施上の課題について「教科との関連に十分配慮していない実態、教科の時間への転用などが指摘されている」との報告が行われた。そこで本研究では、これまでの先行研究や実践報告を踏まえつつ、中学校３年間を通じて「総合的な学習の時間」と教科、特に「英語」が有機的に関連しあうカリキュラムの開発を行うこととした。

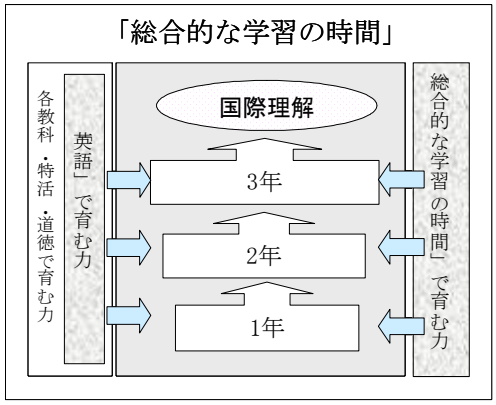
研究の内容

１　研究の進め方

第１図は「総合的な学習の時間」と教科等が３年間を通じて相互に補完しあう関係を示している。矢印は、教科等の学習で身に付けた知識や技能を用いて「総合的な学習の時間」の課題解決学習を行うこと、そしてその課題となったことを再び教科等で学習することを示している。本研究ではこの時間で育む力と「英語」を例とした教科で育む力を、生徒の発達段階を考慮しながら考察し、その内容を踏まえた上で「総合的な学習の時間」のカリキュラムを作成する（第２図）。また、この時間のテーマは、次の理由により、３年間を通じて「国際理解」とした。



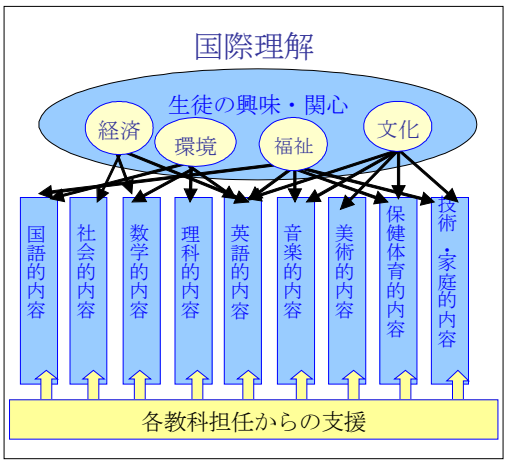
第１図「総合的な学習の時間」と教科等との関係



第２図　本研究の構想図

（１）３年間同一のテーマを設定することにより「総合的な学習の時間」と教科との関係がより明確になる。
（２）発達段階を考慮した系統的な指導が行える。
（３）横須賀市の地域の特色を生かした指導が行える。
（４）「国際理解」のテーマは、生徒の興味・関心に応じて、様々な教科担任が指導に関わることができる。（第３図）

1　横須賀市立鷹取中学校
研修分野（「総合的な学習の時間」）



第３図　「国際理解」と各教科との関係（例）

２　「総合的な学習の時間」で育む力の分析

第１表「総合的な学習の時間」のねらい

（１）　自ら課題を見付け，自ら学び，自ら考え，主体的に判断し，よりよく問題を解決する資質や能力を育てること。
（２）　学び方やものの考え方を身に付け，問題の解決や探究活動に主体的，創造的に取り組む態度を育て，自己の生き方を考えることができるようにする。
（３）　各教科，道徳及び特別活動で身に付けた知識や技能等を相互に関連付け，学習や生活において生かし，それらが総合的に働くようにすること。

中学校学習指導要領（平成10年12月告示，15年12月一部改正）

目標:「自ら学ぶ力の育成」

課題を設定する力
① 興味・関心を持って物事を見ることができる。
② 疑問を持つことができる。
③ 問題の広がりと関連性を理解することができる。
④ 見通しを持ちながら課題を設定することができる。

学習を進める力
⑤ 学習計画を立てることができる。･･･解決方法や手順を見通すことができる。
⑥ 必要な情報を収集することができる。
⑦ 情報を整理し、分析することができる。
⑧ 情報をもとに考察することができる。
⑨ 考察した内容をまとめることができる。
⑩ 考察した内容をもとに自己の考えを導くことができる。
⑪ 自己の考えを表現することができる。
⑫ 他と関わりながら学び合うことができる。
⑬ 討論した内容を踏まえて自己の意見を更に深めることができる。
⑭ 課題に対する自己の意見を社会に発信することができる。

自己の生き方を考える力
⑮ 学んだ内容を振り返り、自己の考えを深め広げることができる。
⑯ 課題に対する自己の生き方を考え、よりよく行動することができる。

第４図「総合的な学習の時間」で育む力

本研究では、平成10年12月告示、15年一部改正中学校学習指導要領（以下「中学校学習指導要領」とする）に示された「総合的な学習の時間」のねらい（第１表）を分析し、この時間で育む大きな三つの力、即ち「課題を設定する力」「学習を進める力」「自己の生き方を考える力」を設定した。更に学習段階を考慮しながら第４図の16の力を設定した。

なお、「総合的な学習の時間」では「自己学習力」の育成を目指すため、本研究ではこの時間の目標を「自ら学ぶ力の育成」とした。

３　「国際理解」で育む力の分析

目標：　地球的課題の解決に向けて、共感的な態度で活動していく「地球人」の育成

地球的課題を理解し、自己の課題を設定する力
① 日本の文化や世界の文化の多様性に興味を持ち、理解することができる。
② 地球的課題の現状と課題に興味を持ち、疑問を持つことができる。
③ 地球的課題と日常生活との関連について理解することができる。
④ 自己の課題を設定することができる。

課題の解決に向けて学習を進める力
⑤ 学習計画を作成することができる。
⑥ 必要な情報を収集することができる。
⑦ 情報を整理し、分類することができる。
⑧ 情報をもとに、地球的課題の解決に向けて考察を行うことができる。
⑨ 考察した内容をまとめることができる。
⑩ 考察した内容をもとに建設的に自己の考えを導くことができる。
⑪ 自己の考えを表現することができる。
⑫ 共感的に意見を交換したり、体験を共有したりすることができる。
⑬ 討論した内容を踏まえて自己の意見を更に深めることができる。
⑭ 地球的課題に対して自分たちが何をすべきかを外部に発信することができる。

自己の生き方を考える力
⑮ 地球的課題に対する認識を従来より深め、広げることができる。
⑯ 地球的課題を意識した実践的態度をとることができる。

第５図　「国際理解」で育む力

本研究における「国際理解」で育む力は、平成８年７月第15期中央教育審議会第一次答申「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」及び平成10年７月教育課程審議会（以下「10年教課審」とする）に示された国際理解教育のねらいに、地球的課題の解決に向けて実践的な社会参加を促す社会教育的な視点を加えて導きだすこととする。本研究における「国際理解」の目標は「地球的課題の解決に向けて、共感的な態度で活動していく『地球人』の育成」とし、そのねらいを次の三つに設定した。

（１）日本や諸外国の文化、地球的課題に対する理解を深めること。
（２）異なる文化を持つ人々と共生していくため、地球的課題への認識を深め、課題の解決に向けて広い視野で取り組んでいく態度を育成するとと

もに、相互理解のためのコミュニケーション能力を育成すること。

（３）自己の確立を図り、課題の解決に向けた実践的な態度を育成すること。

上記のねらいから、「国際理解」で育む大きな三つの力を「地球的課題を理解し、自己の課題を設定する力」「課題の解決に向けて学習を進める力」「自己の生き方を考える力」とし、更に学習段階を考慮しながら第５図の16の力を設定した。

４　「英語」で育む力の分析

「中学校学習指導要領第２章第９節外国語（以下「中学校学習指導要領外国語」とする）によると、外国語の目標は「言語や文化に対する理解」と「コミュニケーション能力の育成」の二つである。「英語」には「聞く」「話す」「読む」「書く」ことに関する四つの目標があり、言語活動に関する指導内容が示されている。「総合的な学習の時間」におけるコミュニケーション活動は「英語」の目標に対応するように考慮した。また学習段階を考慮した各学年の配慮事項、更には「３学年間を通した全体的な配慮事項」のうち「言語の使用場面の例」が実践できるような工夫をした。次に教科書に沿って文法事項、主な品詞、学習時期、学習内容を明らかにしながら、年間計画を作成した。（第２表）

第２表　３年生計画例

月	単元名と学習内容	基本文	動詞	名詞	形容詞	その他	指導目標
6	Speaking Plus１ 先生にお願い	**May I** ask you a favor? / **Could you** help me?	ask	favor / letter		ask…a favor / could / may	目上の人に対して丁寧に許可を求めたり、依頼したりすることができる。

５　「総合的な学習の時間」年間計画作成の留意点

（１）年間計画を作成する際の留意事項

「総合的な学習の時間」の年間計画を作成する際には、次の点に留意した。

ア　３年間を通じて「国際理解」のテーマで学習を行い、各学年の発達段階を考慮した活動内容にすること。

イ　各活動は、「『総合的な学習の時間』で育む力」や「『国際理解』で育む力」「『英語』で育む力」が身に付くような内容にすること。

ウ　体験的な活動を通して、コミュニケーション能力の育成を図ること。

エ　コミュニケーション活動は、中学校学習指導要領外国語の目標や配慮事項を考慮しつつ、発展的な学習としての意味合いも持たせること。その際、言語活動の取扱いに示されるような場面を数多く取り入れること。

（２）１年生活動例　（100 時間）

ア　目標：自分たちの生活と地球的課題との密接な関係を理解し、外国人と交流を行いながら課題の解決に向けて積極的に行動できるようにする。

イ　主な活動内容：

（ア）身の回りの輸入製品を通じて日本と諸外国とのつながりを知り、そこから見えてくる様々な問題に興味を持ちながら学習計画を立てる。

（イ）大使館、会社、交流協会等に連絡をとって調査を行ったり、実際に自分の調べた国の人と会って取材を行う。

（ウ）自分の興味を持った国の人と連絡をとり、文通やメールなどによる交流を行う。

（エ）発表会を行い、学習成果を効果的に伝える。

（オ）課題解決に向けて実際に行動する。

（カ）年間の学習内容をレポートにまとめる。

（３）２年生活動例　（105 時間）

ア　目標：地域在住の外国人との交流を通じて視野を広く持ち、地域の一員として共に地域を良くしていくために行動できるようにする。

イ　主な活動内容：

（ア）地域在住外国人と交流しながら、地域の諸問題について考え、学習計画を立てる。

（イ）地域マップを作り、地域在住外国人に地域を案内する。

（ウ）地域の諸問題について調べ、住みやすいまちづくりについて考える。

（エ）課題の解決に向けて行動する。

（オ）鷹取川の清掃を行う。

（カ）発表会を行い、学習成果について話し合う。

（キ）年間の学習内容をレポートにまとめる。

（４）３年生活動例　（105 時間）

ア　目標：海外の生徒との交流を通じて地球的課題に対する視野を広く持ち、その解決に向けて行動することができるようにする。

イ　主な活動内容：

（ア）地球的課題（福祉）の解決に向けて海外の生徒と交流し、情報交換をする（メール、ビデオレター等）。

（イ）地球的課題の解決に向けた学習を行う。

（ウ）ボランティア活動を体験し、ボランティアに対する認識を深める。

（エ）学習の成果を生かしながら、高齢者を対象としたボランティア活動を行う。

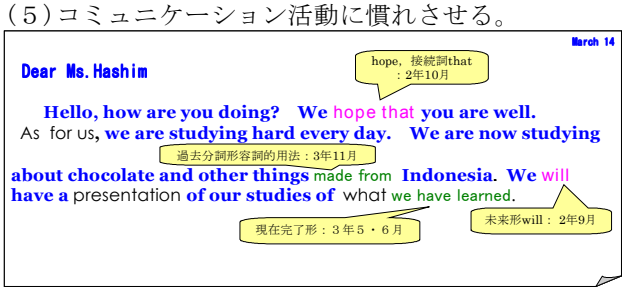
（オ）発表会を行い、学習成果について意見を交換し合う。

（カ）年間の学習内容をレポートにまとめる。

６　コミュニケーション活動の留意点

「総合的な学習の時間」においてコミュニケーション活動を行う際、次のような点に留意する必要がある。

（１）既習事項で表現できる内容を把握しておく。
（２）既習表現を活用する活動を多く計画する。
（３）未習表現に対して積極的に挑戦させる。
（４）未習表現を学習する時期を把握しておく。（第６図）
（５）コミュニケーション活動に慣れさせる。



第６図　学習時期の把握

７　「英語」の学習で発展的に扱う内容

１年生は７月に海外の生徒と手紙の交流を始める。例えば、日付の表現は１年生の２月に学習するが、これを５月に先行して学習すれば、手紙を書く際に便利である。このように「総合的な学習の時間」に「英語」の学習内容を柔軟に対応させていくことで、この時間のコミュニケーション活動が円滑に行われる場合がある。１年生を例とし、英語の学習で発展的に扱う学習事項の例を第３表に表した。

第３表　1年生で発展的に扱うとよい学習事項（例）

文　法	学習年月	留意事項
手紙の書き方	１年生３月	手紙を書く活動が多いため、書き始めや終わり方の指導を早めに行うとよい。
月日の表現	１年生２月	英語の授業で少しずつ扱っていくことができる。早めに扱うことで、表現範囲が広がる。
曜日の表現	１年生９月	英語の授業の始めに、月日の表現と合わせて指導していくことが可能である。
疑問詞	１年生１月	疑問詞は１年１月までに少しずつ学習するが、学習内容によって早めに扱うことが可能である。
序数	１年生１月	数の表現は６月に扱っている。序数は、月日の表現と合わせて少しずつ扱うとよい。

８　「総合的な学習の時間」の評価

本研究における「総合的な学習の時間」の評価は、「10年教課審」で述べられたように、観点別評価を利用して行う。その観点は平成12年12月の教育課程審議会答申で例示された観点のうち、「学習活動への関心・意欲・態度」「総合的な思考・判断」「学習活動にかかわる技能・表現」「知識を応用し総合する能力」の４観点とした。教科の評価観点と共通性を持たせることにより、「総合的な学習の時間」と教科の関わり方が明確になるためである。

生徒が学習目標に達したかどうかを判断するための評価規準は、「『国際理解』で育む力」で示した16項目とする。各学年の活動がこの項目に沿って計画されているため、時系列に従って各活動を評価していくことができるからである。また、各項目の評価を総合することによって生徒が目標にどれだけ近づくことができたかを容易に判断することもできる。評価基準はＡ（十分満足できる）、Ｂ（おおむね満足できる）、Ｃ（努力を要する）の３段階で作成し、活動ごとに行った観点別評価を集約・分析しながら活動の様子を総合的に判断する際の資料として用いる。

９　研究のまとめ

2004年12月に公表された国際教育到達度評価学会（ＩＥＡ）の調査結果で、子どもの学習に対する興味・関心が国際的に見て低いことが指摘された。学習に対する興味・関心を高め、学習意欲を向上させていくためには、各教科のみならず「総合的な学習の時間」の取組を改善していくことが有効な手段と考える。「総合的な学習の時間」と教科との関連性を追究していくことで、両者の教育効果は相乗的に高まっていくであろう。今後「総合的な学習の時間」を一層充実させていくためには、教師の専門性を十分に発揮できる環境を設定した上で、各教科担任が具体的な指導内容を計画し、実践していくことが不可欠である。これまでの各校の取組を生かしつつ、そこに教科学習を組み合わせていくことで、生徒の主体性や興味・関心に沿った柔軟な指導を行うことができるという点を改めて強調しておきたい。今後、本研究が、「総合的な学習の時間」と各教科との有機的な関係を構築していく際の一助となることを願っている。

引用文献

中央教育審議会 2003 「初等中等教育における当面の教育課程及び指導の充実・改善方策について（答申）」
文部省 1999 「中学校学習指導要領」

参考文献

国立教育政策研究所 2004 「総合的な学習の時間の授業と評価の工夫」
有園格・小島宏編著 1999 『学校の創意工夫を生かす「総合的な学習の時間」の展開③　国際理解、福祉・健康の展開』 ぎょうせい
児島邦宏・浅沼茂・佐藤真・高瀬雄二編 2003 『総合的な学習ハンドブック』 ぎょうせい